

日韓学術・教育・文化交流史（Ⅳ）

——桃山学院大学・啓明大学校民際交流の歩み（2015－2020）——

伊代田 光彦

目 次

はじめに

1. 学術セミナーの評価向上を目指して
 - （1）改革の背景 （2）改革の実施 （3）学術交流の課題と成果
2. 民際交流
 - （1）短期交換研究員 （2）交換留学生 （3）短期語学研修参加者
3. 小括

付記 大学評価視点

補遺

1. 啓明大学校・桃山学院大学要職による日韓学術交流の所懐と回想

【1】李炳賛碩座教授の所懐，【2】朴命鎬碩座教授の所懐，
【3】徐龍達名誉教授・鄭基淑名誉教授の回想
2. 桃山学院大学国際センター職員の回想

【1】宮谷真由美職員の回想

資料 桃山・啓明国際交流資料Ⅰ（続）

桃山・啓明国際交流資料Ⅱ（続）

は じ め に

桃山学院大学（大阪府和泉市）と啓明大学校（韓国大邱市）との交流は、両大学間で学術文化交流協定が1981年12月に締結されて以来、2021年には40周年を迎える。先に、この間の交流史（前史を含む）は徐龍達・伊代田光彦編著「日韓学術・教育・文化交流史」（Ⅰ（2016）、Ⅱ（2017a）、Ⅲ（2017b））¹⁾として、叙述された。その後5年が経過している。

この度、40周年（国際学術セミナーは第42回（2021.11月））を迎えるにあたり、その後の経緯を簡単に振り返ることにした。本稿の対象年（補足期間2015－2020）は、前稿（1981－2016）と一部重なる。2015年に国際学術セミナーにかかわる大きな変化があり、この点に関する叙述が不十分であったためである。国内外の教育・研究状況を反映して、セミナー

1) 徐龍達・伊代田光彦編著「日韓学術・教育・文化交流史（Ⅰ）—桃山学院大学・啓明大学校民際交流（1981－2016）の歩み—」『桃山学院大学総合研究所紀要』，42（1），167－207頁，2016年7月；Ⅱ，42（3），129－159頁，2017年3月；Ⅲ，43（1），271－309頁，2017年10月。

キーワード：日韓交流史，学術・教育・文化交流，桃山学院・啓明姉妹大学交流，民際交流，桃山学院大学文庫

は転機を迎えているように思われる。両大学間の交流は、学生、教員、職員にまで及び多面的に展開されている。本稿の叙述は全面に及ぶとはいえ、学術交流が中心である。

叙述には、総合研究所および国際センターから資料提供等協力を得て、できるだけ客観的な事実とデータに依拠するよう意を注いだ。しかしながら、内容は総合研究所によってオーソライズされたものではなく、執筆者の意見も含まれる。啓明大学校との交流に重要な役割を果たしてきたのは徐龍達桃山学院大学名誉教授である。微力ではあるが筆者も姉妹校提携の準備段階から関わってきた。

徐龍達名誉教授の配慮で、啓明大学校の元産業経営研究所長鄭基淑名誉教授、同李炳贊碩座教授および同朴命鎬碩座教授から回想・所懐をいただいた。いずれも要職の歴任者たちである。論稿はいずれも著者たちの率直な回想・所懐であり、文責はそれぞれの著者にある。徐名誉教授は鄭基淑名誉教授との回想の共同執筆者であり、原稿の表現上の補正は三編とも徐名誉教授による。謝意を表したい。

この度も、総合研究所研究支援室および国際センターから資料（データ）提供をいただき、お世話になった。そして宮谷真由美職員からは、啓明大学校交流に関わる貴重な回想を頂戴した。両課の関係職員、並びに宮谷職員に謝意を表したい。

1. 学術セミナーの評価向上をめざして

（1）改革の背景

大学間の国内的・国際的競争の激化を反映し、国際学術セミナーについても改革の波が押し寄せてきた。単純化すれば、セミナーをさらに国際化し、世間の学術的評価に耐えうるものとするのである。併せて、セミナーを合理化し、実施コストの削減を図ることである。このような動きは次第に強くなり、第32回（2011）のセミナー後の協議において、啓明側より明確に提起された。

- a. 国際学術セミナーを拡大し、5大学（5か国）持ち回りで開催すること。
- b. 発言言語は英語とすること。
- c. 発表論文を掲載する学術誌は査読付きとすること（啓明側ではすでに査読化実施）。

これに対して、桃山の『総合研究所紀要』についての査読化はなお検討を要するが、（桃山学院大学の）セミナー発表論文の査読に異論はない。a, bについてもなお検討を要するということであった。第34回（2013）協議では、a, bについて率直に論議した。桃山学院大学は、多国間（5大学間）会議はこれまでとかなり状況が変わるので、実施に難色を示した。会議の英語化については原則的に了解できるが、韓国語、日本語で発表する途も考慮すべきであろう。第32回の桃山学院大学の代表者は総合研究所長鈴木幾多郎経営学部教授であり、執筆者伊代田（経済学部教授）は発表者として参加しており、協議にも参加した。以上の点に関する経緯については、徐・伊代田（2016, 第2章）で述べている。

第33回（2012）セミナーでは、30周年記念式典が、総長代理の朴命鎬副総長他7名を迎え、

行われた。(矢根慎二総合研究所長『総合研究所紀要』, 38(3), 2013, pp. 1-2)。第35回(2014)協議については、つまびらかでないが、第36回(2015)に事態は進展した。

(2) 改革の実施

① 投稿の自由化と使用言語の原則英語化

契機となったのは2015年8月、(桃山側からすれば)突然、伝統ある啓明大の「産業経営研究所」が閉鎖され、『経営経済』も廃刊されることが9月になって本学に伝えられた。これを受けて、国際学術セミナーの主管は経営大学(日本で経営学部に対応する)となった。主管部署は変わるが、これまで通り社会科学、人文科学の大学(学部)とも連携を図って実施していくと言う。

第36回(2015)国際学術セミナー(於啓明大学校)後の協議では、新たな方向性が示された。(次頁の「第36回 国際学術セミナー 協議確認書」を参照)。

- a. セミナーは原則として英語を使用する。日本語、韓国語で発表論文を作成する場合は、英文要旨を付ける。通訳は主催校が用意する。
- b. セミナーの日程は4泊5日から3泊4日に短縮する。(英語報告のため発表は1日で終える)。
- c. 発表者は希望する学術誌に投稿できる。その場合は、発表要旨を『桃山学院大学総合研究所紀要』と『韓国社会科学研究』に掲載する。

上記aについて、「英語化の意義は理解できるものの、発表者側にも事情がありうること、また日本人がハングルで、韓国人が日本語で発表することに意義があるため、原則として英語を用いることをこちらから提案し、了承を得た。」なお、協議確認書には明記されていないが、啓明側より、中国の南開大学を含む三か国間でセミナーを開催するという提案があったが、時間をかけて検討することとなった。査読の問題も引き続き検討課題とした。このような事情により、協議確認書の日付は2016年3月1日となった。「解決すべき点はあるものの、両大学ともこのセミナーの重要性を認識しており、今後とも密接な交流を願っている気持ちに相違はない」。(村上あかね(総合研究所長)「第36回桃山・啓明国際学術セミナー：実施概要」『総合研究所紀要』, 43(1), 2017, pp. 2-3〈「研究所ニュース」, No. 158, 2016.1.29より抜粋〉)。

このような経緯を経て、第36回セミナー以降、論文・発表ともすべて英語となっている。(末尾、桃山・啓明国際交流資料I(続)の「付表1 国際学術セミナー(演題および講師)」参照。)

このように啓明大学校では、国際学術セミナーに関わる制度改革がおこなわれた。啓明大学校『韓国社会科学研究』発表論文掲載の学術誌の査読化に加え(桃山学院大学『総合研究所紀要』については検討中)、投稿学術誌の自由化も盛り込まれることとなった。

第36回 国際学術セミナー 協議確認書

1. 次回(第37回/2016年度) 国際学術セミナー 日程と場所

第37回国際学術セミナーは2016年11月30日(水)から12月3日(土)とし、桃山学院大学で開催する。

2. 次回開催期間と学術発表形式

セミナーは1日の開催とし、両大学から2題目、合計4題目を発表する。

3. 次回発表論文 題目

セミナーの統一テーマは「日・韓の経済・経営及び文化の諸問題」とし、両大学からの2題目のうち1題目は自由テーマを選択できる。

4. 次回発表者と発表論文の通知

両大学は7月末までに発表者と発表論文の題目を相手校に通知する。

5. 次回非開催校 参加者

非開催校(啓明大学校)の参加者は経営大学長と発表者及び学術討論参加者等の5名を上限とする。

6. 回りの通訳の手配

通訳は開催校(桃山学院大学)が準備する。

7. 回りの発表論文原稿

発表者は発表論文を原則として英語で作成し、セミナー開催日の2ヶ月前までに相手校へ送付する。日本語または韓国語で発表論文を執筆する場合には、2〜3ページの英文要旨(研究のテーマや目的・研究の方法・研究結果・研究の含意や提言など)を添付する。また、セミナーでの発表と討論は原則として英語とする。

8. 次回発表論文の完成原稿と論文掲載

発表者は、セミナー終了後、英文要旨を含む完成原稿を執筆する。論文掲載誌は発表者自身が希望する学術誌とし、開催校(桃山学院大学)の紀要に掲載する場合は、1か月以内に開催校(桃山学院大学)へ送付する。

なお、発表者自身が希望する学術誌に投稿する場合は、発表論文の要旨を『桃山学院大学総合研究所紀要』と『韓国社会科学研究』に掲載する。

9. 次回発表者に対する感謝状

開催校(桃山学院大学)は発表者に学長名による感謝状を贈呈する。

10. その他

本協議確認書に定めない事項について、両大学は誠意をもって協議のうえ、善処するものとする。

2016年 3月 1日

桃山学院大学 総合研究所

村上 あかね

所長 村上 あかね

啓明大学校 経営大学

李 枝 雨

学長 李 枝 雨

② 合理化及びコスト削減について

国際交流が活発になるにつれて、交流は少数集中にとどまることなく、拡大・多角化していくので、合理化、経費の節減が問題となる。学術セミナーも例外でない。第37回(2016)以降、論文および発表は英語となり、セミナー開催日は1日短縮された。このため滞在日数も3泊4日と1日短縮となる。また論文の自国語への翻訳も必要でなくなる。セミナー開

始以来、代表団滞在中の宿泊はホテルであったが、第34回(啓明, 2013) および第35回(桃山, 2014)以降、開催校の宿泊施設を利用することとなる。

このような改革・合理化の結果、主催者が注意を怠れば失うものもあることを銘記する必要がある。以下の点が啓明大学校との交流に関わってきた本稿著者の杞憂であれば幸いだ。

第1に、発表および討論の時間は通訳を必要としないので、相当短縮されたが、英語力の十分でない参加者は、参加のためにこれまで以上の努力が望まれる。これは参加者が耐えねばならないグローバル化のコストであろう。でもセミナーの真のねらいは何であろうか。より多くの人々がテーマに関心を持ち、理解を深められるような更なる改善は必要ないだろうか。

第2に、発表論文を自ら望む学術誌に投稿可となった反面、これまではセミナー後発表論文ごとに討論者による「コメントと討議の概要」を付して両大学の学術誌に掲載されていた。これがなくなったため論文を読解し、概要を掴みやすくする利点が失われることとなったようだ。セミナー運営主体として、より多くの人々が関心を深めることに役立つ何らかの手立てが必要と思われる。「第41回 国際学術セミナー協議確認書」(2020年11月17日)において、セミナーでの発表と討論は英語を原則とし、「通訳がいる場合、韓国語又は日本語で発表できるものとする」との文言が加えられた。この点に関する一歩改善であろう。

第3に、さらなる杞憂は、発表論文を両大学の学術誌に掲載する義務がないので、どの学術誌に掲載されたか判明しない。協議確認書で定めた、「両大学の学術誌以外に掲載の場合、発表(論文)要旨を両大学の学術誌に掲載する」点がほとんど行われていないからである²⁾。あるいは掲載されることなく論文改善中かもしれない。この点を善処しないと、大学の予算を使ってセミナーに臨んだが、公刊されなければ、評価の対象にすらならないし、論文テーマに関心のある研究者の研究に役立てる手立ても乏しくなってしまう。結果的に発表するに値しなかったことになってしまいかねないことを憂うる。

③ 提起された問題

第38回(2017)「協議会」では、啓明大学校経営大学長辛珍教教授より、a. 中国を含むセミナーの三国間開催が提起された。加えてb. 東南アジア研究(例えばインドネシア、ヴェトナム等)への参加、さらにc. 実質的な共同研究を推進する機会とするといった問題提起が行われた。また英語で行っている啓明大学校 Global MBA も話題になった。(南出和世(総合研究所長)「第38回国際学術セミナー報告」「研究所ニュース」, No. 164, 2018.1.31)。

2) この点がどの程度遵守されたかを第37回(2016)～第40回(2019)についてみると、桃山学院大学の発表論文8編中、義務を果たしたことが『総合研究所紀要』から認められるのは3編のみで、5編は不明である。啓明大学校の発表者についてみると、『総合研究所紀要』に要旨1編が見られるだけで発表論文8編中7編は判断できない。『韓国社会科学研究』が桃山学院大学には所蔵されていないからである(2021年1月現在)。このような結果になったのは協議会議事録の遵守徹底とその確認作業を欠いていたためであろう。大変残念なことである。今後は善処されることを期待したい。

第39回(2018)では、三か国間開催について桃山学院大学から明確な表明はなく、検討を約すことで終わった。2019年4月オブザーバーとして、啓明・南開大学間の研究会に参加し、開催可能性について協議の場を持てないかという打診が啓明大学校からあり、検討し回答することを約束した。これを受けて、小島和貴総合研究所長と井田憲計総合研究所運営委員が研究会に参加したが、南開大学側にも事情があり、2019年度は実施できなかった。この判断は必ずしも道を閉ざすということの意味するものではない。(第1回所員総会, 2020.2.19)。桃山学院大学でも、未だ3か国間セミナー開催への機運は認められないようだ。

中国の大学と「共同研究会」を行っている、啓明大学校側の事情が強く表れているものと思われる。桃山学院大学は、これまで中国の2大学、民族大学および南通大学との間で姉妹校関係を締結し、交流を重ねている。特に南通大学との間では密度の濃い交流が続けられてきた。いずれにしても、長きにわたる交流の実績は価値のあることである。多くの学生、教職員の交流の蓄積は貴重な財産である。

(3) 学術交流の課題と成果

① 学術研究・教育へのインパクト

国際学術セミナーは、本学にどのような研究上のインパクトを与えてきたのだろうか。研究者個人には、研究成果を発表し、これを機会に自らを成長させる契機となる。これはすでに一定の成果を得ている研究者にも当てはまる。共通テーマの分析を行う共同研究志向から、数は少ないが実質的共同研究を行う研究者も存在した。これらを通じて、組織の水準を引き上げることにもなろう。このような点を含め、徐・伊代田(2016)、第2章3(184-185頁)で述べているが、具体的ではない。今回補遺の中の共同研究は、全成昊韓国学中央研究院教授・啓明大学校鄭基淑名誉教授主導の共同研究が世界プロジェクトに拡大され、桃山学院大学徐龍達名誉教授も参加する極めて評価の高いその具体例であろう。個々の関係者(交換研究員、発表者、討論者等)への様々なインパクトは、個々人に尋ねる以外、十分な把握は困難であろう。

他方、学生へのインパクトを示すデータは、残念ながら存在しない。しかし、かつて刊行された「学生国際交流報告書」の中で、交流を経験した者の体験談、エッセイ等によってうかがい知れる。いずれも躍動感にあふれている。残念ながら、現在はそのような組織的な手掛かりとなるものは見当たらないようだ。

② 大学への貢献

大学への組織的貢献も貴重である。学術交流に伴い、共同研究プロジェクト「日韓比較」を発足させ(1986)、共同研究を推進するとともに、韓国資料収集を行った。共同研究プロジェクトからは、後に啓明の社会科学研究を担う国際学術セミナー発表者(2名)や産業経営研究所長が出現した。韓国資料収集は総合研究所業務となり、諸機関(全国経済人連合会、韓

国経営者協会,韓国銀行ほか)からの寄贈,各大学校研究所(ソウル大学校,西江大学校,檀国大学校ほか)との資料交換により,500冊余が収集された。これを契機に,これらの総合研究所収集資料に加え,経済,経営,社会の統計等基本資料を充実させ,環太平洋経済圏経営研究をモチーフとする桃山学院大学大学院経営学研究科(1993年4月)が設置された。

また啓明大学校には,徐龍達名誉教授を中心とする有志が啓明大学校図書館に「桃山学院大学文庫」を開設した(1996)。寄贈蔵書数はなんと16,000冊余である。啓明大学校最大の文庫として活用されている。共同研究プロジェクトおよび資料収集については徐龍達・伊代田(2007),43(1),第5章1を,「桃山学院大学文庫」については同第5章2を参照されたい。

啓明大学校でのインパクトがどのようなものであるかについては,啓明大学校における分析を待ちたい。しかしながらその組織的・個人的インパクトの一端は,これまでの桃山学院大学および啓明大学校要職経験者,発表者,関係者たちのエッセイ,所懐,回想等のなかに見られる。今回の3編の補遺もまたこの点に資すること大である。

③ 社会的インパクト

学術交流が人的,文化的に広く展開していくことも考えられる。ホームステイや留学生の地域活動への参加などである。大学間交流をベースに展開される関係は重要であり,貴重である。両大学の交換留学生,研修生,交換教員のエッセイ,体験記から,一目瞭然であろう。残念ながら,現在は留学生の報告書は刊行されていない。

交流の多元的社会的価値を認めれば,交流に関わる負担は有益であり,不可欠であろう。そして過度にならない限り容認さるべきであろう。本学と啓明大学校との交流は,教員から学生,職員にまで重層的な広がりを示している。社会は人と人との繋がりで成り立っているゆえ貴重である。

2. 民際交流

新型コロナウイルス(COVID-19)のため,2000年度各種交流プログラムは,国際学術セミナーをのぞき,全て中止となった。国際学術セミナーはオンライン開催となった。発表・討論には60名程度の参加がみられ,活発な討論が展開されたと言う。発表者および発表テーマは,末尾の「桃山・啓明国際交流資料Ⅰ(続)」を参照されたい。

以下の交流の各資料については,末尾の「桃山・啓明国際交流資料Ⅱ(続)」を参照されたい。それ以前の資料は徐・伊代田(2017a)末尾の「桃山・啓明国際交流資料Ⅱ」を参照されたい。

(1) 短期交換研究員

短期交換研究員は,COVID-19のため2020年度夏期は中止,春期も中止となっているが,交流は継続して行われている。これまでの実績をみると,多種多様な学部学科を擁する啓明大学校側にこの制度へのより強いニーズが認められる。

(2) 交換留学生

交換留学生制度も順調に継続している。留学期間1年として考えているため、留学期間半年の場合は2名となり、留学生人数で単純に比較することはできない。ここでも、日本文化研究所、日本学科、日本文学科などがあるため啓明大学校側に桃山学院大学以上のニーズが認められる。

(3) 短期語学研修参加者

短期語学研修は、おおむね、順調であるが、COVID-19 のため2020年は中止となる。これまで21年間で、やむなく中止の年もあったが、両大学の参加者総数は等しく、それぞれ101名である(2020年現在)。

3. 小括

両大学の交流には、学生から教職員まで様々なタイプのものが存在し、結果的にはバランスがとられ、双方のニーズがおおむね充たされているように思われる。このような状況に至ったことは、多くの教職員の地道な努力のたまものであり、一朝一夕に生じたものでない貴重な成果であろう。歴代の所長及び関係する教職員が、国際学術セミナー改善、両大学間の交流促進のために様々な試みをしてきた結果でもある。このような努力が両大学で共有されて初めて継続されるものであろう。それは、必ずしも個々のプログラムにおいてではなくとも、全体としてバランスが取れていればよいと思われる。個々の大学それぞれの事情は異なるからである。気になるのは、改革、合理化が、注意を怠れば改善にならず、安きに流れてしまいはしないかという点である。

交流の成果は個々の参加者に帰属し、その評価は一人一人に委ねられよう。しかしながら組織としても、個々のプログラムの経緯や結果を示すデータを整理し、組織の評価及び改善の糧にしていく必要があろう。個人の評価を把握できるような試みがあればなおよい。たとえば、かつての国際交流誌「国際交流報告書」および「おもろいぞ 地球！」などから彼らの躍動感あふれる姿が観察されるからである。このような試みが廃止となったことには、それなりの理由があるとしても、何らかの形あるものを残すことは必要と思われる。成果は参加した人々の経験として個々人の中にあり生かされるとしても、予算と人を使った組織にも証は重要であろう。交流の大きくかつ貴重な意義を認め得る証拠ともなる。

韓国資料収集が桃大経営学部大学院の設置に大きく貢献したこと、大量の寄贈図書により開設された啓明大の「桃山学院大学文庫」も民際交流の貴重な成果と言える。これに携わった人々の地道な努力に敬意を表したい。

【付記】大学評価視点

世界中で大学のランキング付けによる競争がしのぎを削って行われている。その結果が

公的予算配分,研究費配分,入学志願者数にも反映してくるため多くの大学が必死となっている。しかしあまりにも熾烈ゆえ,教授・研究者に剽窃論文が出現する事態にも至った。行き過ぎた状況の中で,英国の名門3大学(ロンドン大学,オックスフォード大学およびケンブリッジ大学)は一時公的評価への参加を取りやめた。英国では,近年,在学生自身の評価に基づく大学評価が行われるようになった。

バッキンガム大学はイギリスにおける最初(1976年創立)で,唯一の私立大学である。近年行われている学生の大学満足度評価で,同大学は制度発足(2006年)以来,トップないしは準トップを続けている。学生満足度に関する国家学生調査(National Student Survey)は,大学(カレッジを含む)最終学年の全学生を対象として行われる。学生満足度ナンバーワンというのは極めて栄誉なことで,今後の大学の方向性を示す先例となるような気がする。学生の定期試験前に緊張感を和らげるカウンセリング・サービスまで行っている。タイムズ紙によると全英大学ランキング(2012年)では21位であったが,近年医学部も創立され順位を上げている。加えて,2020年6月発表の「教育の質と学生の成果」(Teaching Excellence Framework)では金賞(6つの全カテゴリでダブルポジティブ(最上位)の評価)を獲得している。教育の質,教育環境,学生の成果について行われる評価結果である。これらの栄誉に全英の大学は注目している。

バッキンガム大学は桃山学院大学が英国で提携した最初の姉妹校である(1991年)。このように大学評価視点からも示唆に富む点がある。桃山学院大学は,姉妹校締結以後,短期英国文化研修生(グループ)の継続的派遣,交換留学生派遣,教員の研究交流など幅広い交流を継続している。筆者が客員教授としてたびたびお世話になり,自ら学位を取得した大学でもある。徐龍達名誉教授も同大学客員教授であった(徐稿,「英バッキンガム大学少数人数教育に学ぶ」『毎日新聞』2001年1月26日付文化欄)。

補 遺

徐龍達名誉教授の配慮により,啓明大学校の元産業経営研究所長3名から文章をいただいたことは貴重である。桃山学院大学徐龍達名誉教授自らも共同執筆に加わる。いずれも両大学の交流に関わってこられた要職歴任者たちである。これまでも啓明大学校の要職3名から所懐・素懐を得ていたが,民際交流に関わる記述はもっぱら桃山学院大学側の視点からであったので,啓明大学校側からの所懐および回想は貴重である。著者たちから日本語の原稿をいただいたが,徐龍達名誉教授による表現上の補正を経ている。

1. 啓明大学校・桃山学院大学要職による日韓学術交流の所懐と回想

【1】李炳贊碩座教授の所懐

桃山学院大学と啓明大学校との学術交流40周年を目前に

啓明大学校碩座教授,元産業経営研究所長 李 炳 贊 (イー・ビョンチャン)

まず,1981年12月に両大学の間で学術・教育・文化交流協定が結ばれ,1982年に桃山学院大学で第1回共同研究会を開催して以来,すでに40周年を迎えようとしている。まことに感慨無量で,これまでの両大学の労苦に無限の賛辞を送りたい。

私は協定締結の当時,啓明大学校の財務処長を努めていた。交流に直接責任を持つ部門ではなかったため,正確なものではないものの,当時の状況についての記憶が少しは残っている。その記憶をたどってみると,1980年8月に初めて桃山学院大学の学生が中心となった「韓国歴史文化セミナー」研修



李炳贊 元産業経営研究所長

団(引率団長徐龍達教授)が啓明大学校の大明キャンパスを訪問した。その時,徐龍達教授と,今は多分引退されたと思われる元教授らが一緒に来られたことを覚えている。現在も続いている両大学間の交流は,このように多くの教授の苦労によって,はじめの一步を踏み出せたおかげだと思われる。

教授たちの学術セミナーは,1981年に協定が締結され翌年から開始された。私はその最初の1年間は,サバティカルで米国のネブラスカ州立大学に行っていたので,第1回,第2回セミナーについては,述べられない。だが,1983年7月に桃山学院大学で開催された第3回セミナーには,私も発表者として参加した。2日間の発表大会後の3日目は,百貨店を1か所訪問した後,是非行ってみたかった愛知県のトヨタ自動車株式会社を訪問した。当時,韓国企業よりはるかに先行していたJust-in-Time技法の現場を視察し,深い感銘を受けた記憶がある。

これまでセミナーは1年も絶えることなく継続され,主題も経営学と経済学を中心に文化や歴史,法制度の問題に至るまで,さまざまなテーマで発表・議論された。両国間の相互理解と協力という次元で,虚心坦懐に交流が行われ,理解が増進されたことは,大きな成果だと言わざるをえない。民間レベルでの,特に大学間の学問を通じた交流は,表面的な親睦の次元を超えて,論理的かつ理論的な土台でお互いの相違点と共通点を発見し,相互の発展に貢献しようと努力する。その結果,学問の発展はもちろん,お互いの理解が深まる契機となったと思われる。非常に貴重な,価値のある活動だったと思う。

また,過去40年間の間に多くの教授たちが,両大学を往復してセミナーに参加し,友情を深めることができた。これまた,学術的交流に劣らず両大学はもちろんのこと,韓・日両国間の親善増進に多大な貢献をなし,民間交流の模範になったと考える。これまでに出会った桃山学院大学総合研究所の所長たちと教授各位,また職員の皆様の心のこもった奉仕と苦勞に感謝の拍手をお送りしたい。

私は2013年8月に引退するまで,啓明大学校経営学部で約40年間勤務し,2000年3月か

ら2006年2月までの6年間、産業経営研究所長を務めた。両大学間の交流に関しては、最も長い期間、最も多く訪問し、そして最も多くの方々と出会うことになった。

桃山学院大学への訪問の中でとりわけ記憶に残るのは10年前、両大学の交流30周年記念式に出席したことである。全般的に記念イベントは質の高い計画でよく準備され、進行もきっちりした形でスムーズに行われたことに大きな感銘を受けた。特に記念式では礼拝が敬虔に捧げられて、大学が設立されて以来かなりの期間が経ったのにも関わらず、まだクリスチャン大学の精神が生きていることを実感した。クリスチャンの一人として深い感動を受け、心から感謝してやまない。

両大学間の交流は、韓日間の交流史の中で民間交流としては、おそらくもっとも長期間、中断することなく継続されている。深い理解と親善で、みなぎることもなく、足りなくもない、国際交流の模範を見せてくれたのではないかと思う。今後も50周年、100周年と続けることを願いたい。現在は両国関係が少し疎遠になっているが、両大学が相互に努力して「近くて遠い国」ではなく、事実に見合う「近くて近い国」になるように少しでも貢献できることを願う。そして韓・日両国は善隣としていつまでも相互補完的で、協力的な関係を継続して北東アジアにとどまらず、ひいては世界をリードする中心国家になれるよう望んでいる。

李炳贊（イー・ビョンチャン）略歴：ソウル大学校で経営学修士、慶北大学校で経営学博士号を取得。啓明大学校経営大学学長、財務处处長、産業経営研究所所長、経営大学院院長を歴任。2013年啓明大学校を退職、碩座教授に委嘱。米国ネブラスカ州立大学とロングアイランド大学で客員教授。韓国中小企業学会副会長、韓国生産管理学会副会長、韓国産業経営学会会長、韓国ロゴス経営学会会長などを歴任。現在、産学研究院院長、大邱慶北労働委員会公益委員、(株)世元実業社外理事。2013年韓国政府から黄條勤政勲章を受賞。

【2】朴命鎬碩座教授の所懐

韓・日 国際学術交流 40 年の所懐

啓明大学校碩座教授、前啓明文化大学校総長

朴 命 鎬 (パク・ミョンホ)

啓明大学校と桃山学院大学との「交流30周年記念式典」と「第33回国際学術セミナー」が、2012年11月26日から5日間、桃山学院大学で開かれた。この行事に参加した、私たち一行を明石吉三学長と水谷和生理事長が手厚く迎えて下さった。大学のチャペルで開かれた記念式典は厳かで盛大、非常に意義深かった。当時、私は啓明大学校の副総長としての資格で、記



朴命鎬 前啓明文化大学校総長

念式典で啓明大学校の申総長に代わり、挨拶を申し上げた。このすべてのことが昨日のようだが、もう8年も過ぎている。しかも国際交流40年史の発刊が計画されているというから隔世の感が深い。

私の生涯初の渡日は、1988年12月、桃山学院大学で開かれた国際学術発表会に参加したときだった。当時、私は啓明大学校国際部長を拝命していたので、姉妹大学で開催される国際学術セミナーに参加することが、いろいろな面で意義深いことであった。個人的には兵庫県尼崎市に住んでいた親族（叔母）にも初めて会うことができた。その家の住所が紛失されて長い間、連絡できなかったが、全在紋教授が苦勞して親族の居場所を探して下さった。その恩義は今でも深く銘記している。

1987年12月に啓明大学校で開かれた国際学術セミナーには、桃山学院大学総合研究所長だった伊代田光彦教授が引率者として来韓された。セミナーの後、両大学間での今後の計画について話し合ったが、伊代田先生の徹底した会議の準備と精緻な議論に大きな教示を受けた記憶は未だ新鮮である。私も会議を比較的緻密に準備する傾向があり、それ以来啓明大学校の同僚たちが、私のことを「啓明の伊代田」と呼びながら冗談を言ったりもした。しかし、伊代田先生の徹底さに及ぶ筈もない私が、とても比較などできもしない。私は2015年2月に啓明大学校を退任し、同年3月から啓明文化大学校の総長に赴任したので、私と桃山学院大学との公式的な関係は終わった。だが、2019年2月末をもって総長職を終えるまで、伊代田教授とは年賀状を交換したし、先生はいつも身に余る激励をして下さったのである。この場を借りて伊代田教授に心から尊敬と感謝の念をお伝えしたい。

桃山学院大学との学術交流は、スポーツをはじめ、さらなる交流にも繋がった。1990年の夏、啓明大学校のアメリカンフットボールチームの学生たちが、桃山学院大学チームと一緒に日本でトレーニングをすることになった。私が、啓明アメフットチームの指導部長だったので、桃山学院大学に合宿合同訓練を要請し、ついに成功した。合同訓練過程の間、体育担当の高成廈教授がいろいろ指導して下さい。桃山学院大学チームの指導部長だった藤間繁義教授は、関西の大学アメフット1部リーグチームである関西学院大学チームとの交歓試合も計画して下さい。啓明大学校の学生たちは、本当に多くのことを学び、身につけた。学生レベルの素晴らしいスポーツ交流活動だったと思う。このほかにも、啓明大学校の最高経営者課程（AMP）の院生たちが、現場学習プログラムの一環として桃山学院大学を数回訪問した。韓国の企業経営者である彼らは、毎回多くの教授たちから特別講義を聞き、また大阪近隣の会社を訪問して有益な現場研修を行った。これらのすべてのことは、両大学間の交流を重視した桃山学院大学のリーダーシップの配慮なしには不可能な交流実績であった。

私はまた二度も短期交換教授（1994年、2008年）に選ばれ、研究者として桃山学院大学を訪問した。2008年の夏には、同大学院の学生を対象に特別講演も行った。日本のマーケティングの権威者である鈴木幾多郎教授は、シニアマーケティング研究に関して私にいろいろ助言して下さい。国際交流担当の岸本裕一教授には「京都祭」にお招きいただき、特別な文

化体験をすることができた。2回の訪問で多様な日本文化を体験し、また桃山学院大学の先生方から多くのことを学んだ。

このように、長年に亘る国際学術交流は、両大学の発展に大きく役立ったものと確信している。啓明大学校の教職員をはじめ、桃山学院大学の皆様に深く感謝する。特に、国際学術交流の当初から、これまで尽力された徐龍達名誉教授の犠牲的精神に深く感謝の言葉を申しあげる。90歳を眺める年齢でありながら、今も疲れを知らない熱情と愛情で両大学学術文化交流の40年史を企画編集される姿に、尊敬の念が自然とにじみ出る。また、全在紋教授も韓国語に通じておられて通訳と解説に多くの苦労をされ、両国の文化的な違いを理解できるようにして下さったことはとても有意義であった。

今日における韓・日間の政治的な摩擦を物ともせず、40年に及ぶ両大学間の国際学術交流は、アジアのみならず世界的にも珍しいことではないか。正しく「積土成山」のことだろう。私は優に国家間の学術交流の成功モデルだと確信している。このような成果の背後には指導、支援と激励を惜しまない両大学の総長ならびに教職員たちがおられる。これらの方々に謹んで敬意を表したい。今後とも国際学術交流が活発に行われ、韓・日両国の更なる発展と多様な国際親善の増進に大きく貢献できるよう切望する。

朴 命 鎬（パク・ミョンホ）略歴：ソウル大学経営大学院修了。米国アラバマ大学経営学博士。韓国啓明大学校国際部長、企画調整処長、事務処長、経営学部長、経営大学院長、図書館長を経て啓明大学校副総長、啓明文化大学校総長を歴任した。現在、啓明大学校碩座教授、中国南開大学客座教授、韓国国際文化交流振興院理事、大邱伝統市場振興財団理事。学会では、韓国戦略マーケティング学会会長、韓国産業経営学会会長など。

【3】徐龍達名誉教授・鄭基淑名誉教授の回想

桃山大・啓明大日韓学術交流の拡大への回想

桃山学院大学名誉教授 徐 龍達（ソ・ヨンダル）

啓明大学校名誉教授 鄭 基淑（チョン・キスク）

先駆的な日韓学術文化交流の生成発展

桃山学院大学の徐龍達を専任講師に採用内定したのは1962年秋で、翌年からの就任は、日本の4年制大学で外国人任用の第1号とされた。徐の終生にわたる足跡には、日本の「国公立大学外国人教員任用法」の獲得など、いくつかの特徴ある実績が残る。その一つが桃大徐ゼミナール一行の韓国訪問を契機とする啓明大学校との姉妹校締結交流史である。



鄭基淑 啓明大学校名誉教授

1968年3月29日からの10泊11日間の徐ゼミ韓国旅行は、釜山大、ソウル大、高麗大、延世大、梨花女子大と各企業工場見学や史跡探訪を含めて、学生交流と親睦推進の目的を達成したといえる。とりわけ東洋テレビのマスコミセンダー訪問は、「日本の大学生の初訪韓」として大きく報道された。大韓聖公会での李天煥（イ・チョンファン）大主教（延世大学校理事長）主催の歓迎会で、多くの大学生と交流できたことも印象に残る。

その後の数次に亘る訪韓ゼミ旅行で、ソウルの慶熙大学校（趙永植総長）訪問の時、韓国経済経営史研究所長金炳夏（キム・ピョンハ）教授（大阪大学で経済学博士号取得）との再会、同大学との数年に亘る交流は非常に友好的で好評であった。その後、金教授が大邱（テグ）市の啓明大学校（申一熙総長）に転勤され、徐らが招かれることになる。

とき移り1979年6月、徐龍達（ソ・ヨンダル）教授が啓明大学校を訪問し、大学企画室長の鄭基淑（チョン・キスク）教授（専攻が徐と同じく会計史）と会見、学術文化交流の可能性を打診した。同年11月、鄭教授が著名な大阪外大の金思燁（キム・サヨプ）教授同伴で桃山学院大学を公式訪問、それに呼応して翌80年3月、桃山大の村田恭雄学長、品川実男教育後援会長、「韓国朝鮮史」担当の鄭早苗（チョン・ジョミヨ）講師が啓明大学校を礼訪して両大学交流への機運が高まった。

一方、1980年と81年の第1・2回の「韓国歴史文化セミナー」が、徐龍達教授引率団長のもとで成功を収めた。正式の啓明大学校姉妹校締結目的の桃大教授会代表調査団（徐龍達団長、各部署代表の伊代田光彦教授ら7名で構成）の現地調査報告によって、1981年12月に両大学姉妹協定が締結された。

その間、陰に陽に鄭基淑教授が支援活動され、第1回学術交流セミナーでも報告者となった。その後も、啓明大学校側の交流窓口となった産業経営研究所長としての働きも大きく、その評価詳細は『桃山学院大学経済経営論集』第42巻第1号（2017年7月）に詳しく述べられている。

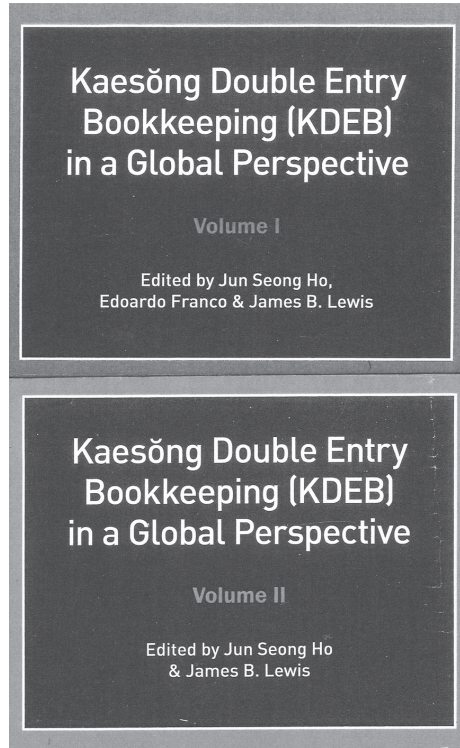
韓国学中央研究院での複式簿記の研究

桃大啓大学術交流の追加的な実績として、複式簿記制度の日韓比較研究が、イギリス、ドイツ、中国、韓国、日本の5か国の研究者によって実現したことは大きな成果であった。ソウルの郊外、城南（ソンナム）市に設立された韓国学中央研究院 Academy of Korean Studies は、国立の大学院大学である。同研究院の全成昊（Jun Seong-Ho）教授と啓明大の鄭基淑教授が中心となって国庫助成が獲得され、2011年から2013年までの3年間、同学院での共同研究が継続された。

古くから、複式簿記はイタリアのF. L. パチョーリ（Fra Luca Pacioli）の教学書（1494年）の1編「計算および記録に関する詳説」が最初だとされてきたが、オーストラリアの研究機関によって、韓朝鮮の高麗時代（918～1392年）の「開城（ケソン）簿記」、「四介松都治簿法」（Sage Songdo Chibubeob）が最初だと主張された。これを契機に、韓国と日本でも研究が拡

がった。また、中国でも宋時代の「四柱結冊法」が、さらに日本では江戸時代の「出雲帳合」が話題となった。

世界的に著名な文豪 J. W. ゲーテがその著作『ウィルヘルム・マイスター』(1795 年)の中で、「複式簿記は人間の生んだもっとも立派な発明の一つである」と述べていることから、世界中で研究課題になっている。そのグローバルな見地からの韓国での共同研究には、オックスフォード大学の J. B. Lewis, ハイデルベルグ大学の Nanny Kim, 中国 Chong Qing Technology and Business 大学の李孝林他 2 名, 日本からは桃山学院大学の徐龍達, 拓殖大学の三代川正秀, 韓国中央研究院の全成昊, Edoardo Franco, Wenn Zhang, Evelyn Ruiz, 韓国科学技術院の許成寛(ホ・ソングアン), 啓明大学の鄭基淑ほか啓明大 3 名, Korean Institute of Public Finance の Choe Yong-Seon, 延世大学の Woo Dae-Hyung など, 世界の 5 か国以上から 20 人余りの教授たちが参加した。その研究成果は, 全成昊・エドワード フランコ・J. B. ルイス編著『世界的見地から見た開城簿記—ヨーロッパ, 中国, 日本との比較研究(1786～1910)—』として 2016 年 6 月に英文(Volumes I, II)と韓文で出版された(表紙写真を参照)。



「共同研究」の英文成果 I, II の 2 冊

日韓比較研究の拡大と「学術功労賞」の受賞

この共同研究の韓国人と日本側の主な発表論文は, 上記の英文 Vol. II によれば次のとおりである。

【韓国】許成寛(韓国科学技術院前院長)

「パク・ヨンジン家の 19 世紀末における韓国複式簿記帳簿の会計処理方法の進化」(On the Evolution of Accounting Methods in the late 19th Century Korean Double-entry Bookkeeping Records of the Pak Yeong Jin Family)

鄭基淑(啓明大学校名誉教授)

「開城簿記会計冊の種類と性格」(Classifications and Characters of “Hoekye Ch’aek” in Kaeseong Bookkeeping)

全成昊(韓国学中央研究院教授)

「朝鮮開城における高麗人蔘事業の帳簿とその再現の科学的な実践」(Scientific Practices of Book-keeping and Re-emerging of Ginseng Enterprise in the North Korean City of Kaeseong (1786 – 1905))

【日本】徐龍達 (桃山学院大学名誉教授)

「日本の江戸・東京時代における『帳合法の研究』—『山陰帳合』に関する事例研究」(Research on Chōaihō — in the Edo and Early Meiji Periods — A Case Study of San-In Chōai)

三代川正秀 (拓殖大学教授)

「江戸時代における日本の簿記形態—帳合の終焉」(The Style of Japanese Bookkeeping in the Edo Period — Demise of Chōai —)

なお、共同研究主題の「韓朝鮮固有簿記」の現存する代表的な著書は、玄丙周(ヒョン・ビョンジュ)『実用自習四介松都治簿(サゲソンドジブ)法』(1916年)である。その日米両国での翻訳紹介の徐龍達、鄭基淑、全成昊関係文献は次のとおりである。

徐龍達訳『玄丙周の四介松都治簿法(1)』は『桃山学院大学経済経営論集』第42巻第3号、2001年1月と、続編その(2)は、同上論集第42巻第4号、2001年3月刊で紹介されている。(日本初訳)。

また鄭、全教授とアメリカのパーデュ大学名誉教授ノ・ビョンタク共訳の英文出版、The Sage Songdo Chibubeob for Practical Use and Self-Study が実現し、韓国学の世界化に貢献されたと高く評価されている(『東亜日報』2018年10月31日付)。『東亜日報』チョ・ジョンヨブ記者のインタビューで、さらに英訳者の3教授は、「残された開城商人の実践複式簿記帳簿も、これから英訳して、海外へ広めたい」と語った。

さらに、鄭教授の業績には朗報が続く。「四介松都治簿法」を現代表現に解釈し直して、国内外の学術雑誌に6編もの論文を発表した功績が評価され、韓国会計学会が、2019年6月21日の慶州国際学術大会の席上で、鄭基淑名誉教授に「学術功労賞」を授与したことが報道された(『韓国経済新聞』2019年7月8日付)。

高麗時代の開城商人による帳簿遺産が、「ユネスコ記録文化遺産」として登載される夢をふくらませている今日、鄭名誉教授らの研究動向は、日韓学術文化交流の深化を念願する関係者として、この上ない快挙ではあるまいか(この項、韓国2紙記事の翻訳などは徐龍達記す)。

おわりに、隣国同志の日韓関係が、目先の徴用工、慰安婦とその賠償判決などで最悪の状態にある。歴史的には韓国併合文書に皇帝の捺印もなく、日帝による国権侵奪、条約強制の史実が明示されて、2010年5月に、日本の学者研究者ら540人による日帝蛮行の反省を要求する声明が発表された。日本政府の慣用語「国際法違反」は、正しく「天を仰いでツバキする」に等しい。その改善への方法はある。古くから、犬猿の仲だったフランスとドイツが、世紀の宰相ドゴールとアデナウアーによるECからEU社会への実績である。その基調をなした「エリゼ条約」のアジア版を研究して、1965年の「日韓基本条約」を改廃する英断を期

待したい。ここに、日韓両国の人びとには、江戸時代の朝鮮通信使に育まれた雨森芳洲の儒学「誠心の交わり」と、近江商人の「三方良し」の精神を会得されるようお勧めする所以である。

2. 桃山学院大学国際センター職員の回想

【1】宮谷真由美職員の回想

韓国・啓明大学校との交流史 ― 私と韓国のかかわりを振り返りつつ ―

国際センター事務課職員 宮谷 真由美



桃山学院大学韓国歴史文化セミナー（研修団）：引率団長福田菊社会学部教授（前列左から5人目）
宮谷真由美職員（福田教授の右）、竹中美恵子職員（前列右から2人目）

今、私の手元に「歓迎 桃山学院大学 学生研修団訪問（1995.8.28～8.30）」の横断幕のもと、韓国の学生や先生方と一緒に写った一枚の記念写真がある。25,6年前の1995年夏に「韓国歴史文化セミナー」参加の学生19名を3名の教職員で引率し、啓明大学校のキャンパスを訪問した時のものだ。この時の記録をたどってみると、1995年度のセミナーは第16回とされており、ずいぶん早くから学生たちの交流は始まっていたという事実には驚く。当時は桃山に就職して5年目で、初めて学生研修の引率として海外出張したのが韓国の啓明大学校であった。バスに乗車したままキャンパス見学をしたが、キャンパス移転の途中と伺ったその敷地の広さにびっくりした記憶がある。啓明大学校では予想以上に多くの学生、教職員の方々が私たちの訪問を歓迎して下さった。学生同士の交流の時間に引率者3名で表敬訪問させていただいた申一熙総長は、（途中総長を交代された時期もあるが）現在も現役で総長を務めておられ、希有という言葉では言い尽くせない、啓明の歴史の象徴ともいえるべき重要な存在であろうと思う。

啓明大学校と本学の間で交流協定が締結されたのは1981年12月14日。本学の海外協定

校の中では一番交流の歴史が長く、まもなく40年を迎える。この間、語学研修や交換留学生の派遣・受入といった学生交流だけでなく、国際学術セミナーによる研究交流、交換教員制度による教員の交流も継続して行われてきた。毎年ではないが、職員研修による訪問や受入の実績もあり、数ある海外協定校の中でもこれだけ長い期間、多くの人的交流が継続している大学は啓明大学校をおいて他にはない。私自身は2015年度から国際センターの勤務となって以降、交換留学生、日本語プログラム研修生の受入れや交換教員の受入れ・サポートなどの業務にかかわってきた。しかし、国際センター勤務となる以前から、国際学術セミナーの運営に係る通訳や職員研修受入れ時の通訳などの協力もしていたため、30年近い在職期間のうち啓明大学校とのかかわりはかなり長いと言える。

振り返ってみると、これまで韓国とかかわってきた年月は私の人生の3分の2を超えた。故郷の広島で初めて紹介してもらった焼肉屋さんの在日韓国人一家、大学で専攻した朝鮮語との出会い、大学の先輩に連れて行ってもらったオモニハッキョ（在日韓国・朝鮮人のおばあさんたちのための識字学級）、中之島での韓国語講座の講師体験のほか、韓国・朝鮮人被爆者問題のテーマで卒業論文を書くためにお話を伺った平岡敬社長（当時、中国放送代表取締役、のちに広島市長）からも学生時代の私は多くの刺激を受けた。最初に就職した会社での数多くの韓国人との出会いも、いろいろな意味で私の人生に影響を与えた。こうした様々な出会いや体験の上に今の私が存在するのだと思うと、韓国とかかわってきた歳月の重みを実感する。

現在、日韓関係は国交正常化以降、最悪の状態と言われている。教科書問題や竹島（独島）問題、慰安婦問題はこれまで何度も日韓の間で蒸し返されてきたが、その間にも韓流ブームに乗り韓国を訪問する日本人が増加し、日本を訪れる韓国人も年々増加してきた。2018年度には韓国人の訪日客が過去最高の753万人を記録し、オリンピックに向けてさらに訪日客も増加するものと思われていた。ところが、韓国海軍艦艇とのトラブルや元徴用工への賠償問題などにより日韓関係は急速に悪化し、政府間の対立が解けない中で降りかかってきた新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大。コロナ禍においても、両国政府間で積極的な協力の姿勢は見られず、査証免除措置の停止等コロナ禍に政治問題が絡む状態が続くなど、両国関係は行き詰っている。

多くの国で防疫の措置が続く中で、本学では2020年度の語学研修や交換留学生の派遣・受入れとも中止となった。更に、啓明大学校との間の交換教員も中止、毎年交互に開催校となって開催されてきた国際学術セミナーも開始以来初のオンライン開催となった。国際センターでは、コロナ禍の中でも国際交流の流れを止めないようにと、海外の留学生とのオンライン交流や日本語のオンラインプログラム提供などの取組を行っているが、オンラインにはオンラインなりの良さもあれば、不十分な面もある。

留学や海外研修は、やはり現地の空気の下、その国の料理を味わい、現地の人々と交流するところにその味わいがあるのだと思う。残念ながら、日本では2020年秋以降に一旦入国

制限措置が緩和され始めていたが、感染拡大の第3波を受けて流動的な事態となり、2021年1月現在、海外での感染拡大も相まって先行きが見通せない状況となっている。かつて多くの観光客でにぎわった日本と韓国の間でも、ビザ発給の制限や入国時の検疫の強化を受け、以前のように気軽に行き来ができない状況が続いている。（COVID-19とは長い付き合いになりそうだが）いつか事態が収束し、硬直した日韓関係が和らぎ、自由な往来が再開される日が待ち遠しい。

資 料

桃山・啓明国際交流資料Ⅰ（続）

（1）桃山学院大学・啓明大学校 国際学術セミナー「協議会議事録」（第35回〔2014〕～第40回〔2019〕）

国際学術セミナーのつど開催される「協議会議事録」の要点を、筆者（伊代田）の判断で一覧表にしたものである。セミナーの反省点を踏まえ、次回（もしくは次回以降）に関する合意事項が中心である。議事録の一覧表では省いているが、次回の開催校と開催日（予定）を協議の上記載している。その他の重要な合意文書の一部も含む。（総合研究所保存文書より作成）。第1回～第35回については、「桃山・啓明国際交流資料Ⅰ」（付表1）参照（『桃山学院大学総合研究所紀要』, 42（1）, 2016年7月）。ここに第35回を再掲載しているのは、便宜上大きく変更となった第36回以降との違いを示すためである。

付表1 桃山・啓明協議会議事録（第35回～第40回）

回数（開催校） 開催日	発表テーマ （題目数）	摘要（実施学術セミナーを踏 まえて次回以降について協議）	（非開催校）代表団人数（滞 在日数等）および（開催校） 議事録作成協議出席者
第35回 （桃山） 2014.11.12	統一テーマ 「日韓の経済・ 経営および文 化の諸問題」 （各大学2題 目、計4題目 を原則とし2 日間で行う） 6月末までに 発表者、発表 論文の主題を 相手校に通知	(1) 発表論文は自国語または 英語で作成し、セミナー2か 月前までに相手校に送付する。 論文原稿は両大学で自国語に 翻訳する。 (2) 完成原稿は、英文要旨を付 して、開催後1か月以内に相 手校に送付する。日本語、韓 国語または英語で両大学刊行 の学術誌に掲載する。啓明の 場合、公の審査に通った論文 は『経営経済』に、その他は「会 計情報レビュー」等に掲載す る。 (3) セミナー発表者に学（総） 長の感謝状を贈呈する。	（非開催校）参加者、は総合 研究所長と発表者および学 術討論参加者等とし、5名 を上限とする。 通訳は開催校で用意する。 （桃山） 総合研究所所長代 理 村上あかね （啓明） 産業経営研究所長 崔 武 振
第36回 （啓明） 2015.11.12	統一テーマは 第35回に同 じ。 （発表は4題	(1) 発表論文は英語を原則と する。日本語または韓国語で 執筆する場合には、2-3ペー ジの英文要旨をつけ、2か月前	（非開催校）参加者（啓明） は、経営大学長と発表者お よび学術討論者等とし、5 名を上限とする。

	目を1日で行う) 7月末までに発表者、発表論文の主題を相手校に通知	に相手校へ送付する。発表と討論は英語を原則とする。 (2) 英文要旨を含む完成原稿を作成し、希望する学術誌に投稿する。その場合は、発表論文要旨を『桃山学院大学紀要』と『韓国社会科学研究』に掲載する。開催校の紀要を希望する場合は1か月以内に完成稿を開催校に送付する。 (3) (感謝状) 第35回と同じ。 (4) この確認書に定めのない事項については、両大学は誠意をもって協議の上、善処するものとする。	(通訳) 第35回と同じ。 (啓明) 経営大学長 李 枝 雨 (桃山) 総合研究所所長 村上あかね
第37回 (桃山) 2016.12.1	統一テーマ、発表方法、相手校への通知等(第36回と同じ)	(1), (2), (3) 及び(4)(第36回と同じ)	(非開催校) 参加者(桃山)は、総合研究所所長と発表者および学術討論参加者等とし、5名を上限とする。 (通訳) 第35回と同じ。 (桃山) 総合研究所所長 村上あかね (啓明) 経営大学長 辛 珍 教
第38回 (啓明) 2017.11.23	統一テーマ、発表方法、相手校への通知等(第36回と同じ)	(1), (2), (3) 及び(4)(第36回と同じ)	(非開催校) 参加者(啓明)は、経営大学長と発表者および討論者、職員等とし、5名を上限とする。 (通訳) 第35回と同じ。 (啓明) 経営大学長 辛 珍 教 (桃山) 総合研究所所長 南出 和余
第39回 (桃山) 2018.11.29	統一テーマ、発表方法、相手校への通知等(第36回と同じ)	(1), (2), (3) 及び(4)(第36回と同じ)	(非開催校) 参加者(桃山)は、第37回と同じ。 (通訳) 第35回と同じ。 (桃山) 総合研究所所長 南出 和余 (啓明) 経営大学長 辛 珍 教
第40回 (啓明) 2019.11.19	統一テーマ、発表方法、相手校への通知等(第36回と同じ)	(1), (2) 及び(4)(第36回と同じ)	(非開催校) 参加者(啓明)は、第38回と同じ。 (通訳) 第35回と同じ。 (啓明) 経営大学長 辛 珍 教 (桃山) 総合研究所所長 小島 和貴
第41回 (桃山) 2020.11.17	統一テーマ、発表方法、相手校への通知等(第36回と同じ)	(1) 及び(4)(第36回と同じ) (2) については文言追加。「通訳がいる場合、韓国語又は日本語で報告できる」。	(非開催校) 参加者(桃山)は、第37回と同じ。 (通訳) 第35回と同じ。 (桃山) 総合研究所所長 小島 和貴 (啓明) 経営大学長 辛 珍 教

（２） 国際学術セミナー

第 37 回（2016）以降，発表および討論は英語が原則となる。第 1 回～第 36 回までの演題および講師は，「桃山・啓明国際交流資料Ⅰ」（付表 2）参照（『桃山学院大学総合研究所紀要』（出典は既出））。第 36 回国際学術セミナーの再掲は，1 年前倒しで，発表・討論が英語で実施されたことを示す。

付表 2 国際学術セミナー（演題および講師）（2015～2019）

開催数（場所）	開催年月日	テーマ	報告者
第 36 回 （啓明）	2015.11.11-12	Importance of Quantitatively Comprehending the Advancement of Reconstruction from Disasters: Practical Example from the Great East-Japan Earthquake	EGAWA Akio St. Andrew's University 江川 暁夫（経済学部准教授）
		Perceived Risk, Travel Anxiety, and Intention to Visit Japan after Fukushima Disaster: Differences between Koreans, Chinese and Europeans	JUN Soo Hyun Keimyung University 全秀賢（経営大学経営学部観光経営学専攻助教授）
		Do Properties of Analyst Earnings Forecasts Improve When Firms are Managed by Female CFOs?	HWANG Induck Keimyung University 黄 仁徳（経営大学会計税務学部会計学専攻助教授）
		Indirect Discrimination against Japanese Women Workers	KARUBE Keiko St. Andrew's University 軽部 恵子（法学部教授）
第 37 回 （桃山）	2016.12.1	The Logic of State Shinto in Colonial Korea	AONO Masaaki St. Andrew's University 青野 正明（国際教養学部教授）
		The Relations of Corporate Bribery to Labour Productivity in Emerging Markets: Pre- & Post-Financial Crisis	KAN Young-Hee Keimyung University 姜 永熙（経営大学経営学部経営学専攻助教授）
		Justifications for Return Policy from a Newsvendor's Perspective	KIMURA Shota St. Andrew's University 木村 鐘太（経営学部講師）
		Does Physical Environment of Coffee Shops in Korea Really Matter for Customers to Visit?	KIM Young-Kyu Keimyung University 金 英圭（経営大学経営学部観光経営学専攻（責任）教授）

第 38 回 (啓明)	2017.11.23	<p>A Bureaucrat's Vision of a Modern Japan - The Case of Sensai Nagayo</p> <p>Analysis of the Discourse on Authenticity of Japanese Gardens</p> <p>Social Innovation, Organizational Analysis and Change</p> <p>Analyzing the impact of Inventory Leanness on Energy Efficiency in Korean Steel Firms</p>	<p>KOJIMA Kazutaka, St. Andrew's University 小島和貴 (法学部准教授)</p> <p>KATAHIRA Miyuki St. Andrew's University 片平 幸 (国際教養学部教授)</p> <p>YU Jae Eon, Keimyung University 柳 在彦 (経営大学経営学部経営学専攻助教授)</p> <p>KIM Gil Whan Keimyung University 金 吉煥 (経営大学経営学部経営学専攻助教授)</p>
第 39 回 (桃山)	2018.11.29	<p>Simulation Analysis of Logistics Systems</p> <p>Geographical Features Relating to Construction of Housing for Aged People in Osaka</p> <p>The Influence of Services Cape Factors and Food and Beverage Quality on Customers Future Behavior in Coffee Shops</p> <p>The Effect of Corporate Governance on the Corruption of Firms in BRICs (Brazil, Russia, India, and China)</p>	<p>GAKU Rie St. Andrew's University 岳 理恵 (経営学部准教授)</p> <p>YOSHIHIRO Kensuke St. Andrew's University 吉弘憲介 (経済学部准教授)</p> <p>LEE Sang Hyeop Keimyung University 李 相 俠 (経営大学観光経営専攻助教授)</p> <p>NA Kyunga Keimyung University ナ クンガ (経営大学会計専攻助教授)</p>
第 40 回 (啓明)	2019.11.19	<p>Lip-rounding Property of the Vowel /u/ in Relation to the Mispronunciation of Japanese Loanwords —Based on Element Theory—</p> <p>Fusion of Fisher's Single Negotiation Text Model with Veto Incremax Procedure within a Relative Utility Framework</p> <p>Investigating the Relationship among Inventory Turnover Performance, IT, and Firm and Industry Characteristics</p>	<p>SHIMBO Tomoko St. Andrew's University 新保朝子 (国際教養学部准教授)</p> <p>CHUNG Yun Ho Keimyung University 鄭 淵浩 (社会科学大学教授)</p> <p>KIM Gil Whan Keimyung University 金 吉煥 (経営大学教授)</p>

		The Impact of Fukushima Nuclear Disaster on French Nuclear Policy	MAMEHARA Keisuke St. Andrew's University 豆原啓介 (経済学部講師)
第 41 回 (桃山)	2020.11.17	How Momoyama Managed the COVID-19 Crisis During the Spring 2020 Semester	IWAO Keisuke St. Andrew's University 巖 圭介 (社会学部教授)
		Task Design for Student Output in Asynchronous Online English Classes	WAGNER Adrian St. Andrew's University (国際教養学部講師)
		Examining the Curvilinear Relationship Between Energy Efficiency and Inventory Leanness	KIM Gil Whan Keimyung University 金 吉煥 (経営大学経営学専攻教授)
		Importance of Political Elements to Attract FDI for ASEAN and Korean Economy	KIM Yoon Min Keimyung University 金 允敏 (経営大学経済金融学科教授)

桃山・啓明国際交流資料Ⅱ (続 2017 - 2020)

以下にかかわる資料の 1981 - 2016 については, 徐 龍達・伊代田光彦編著「日韓学術・教育・文化交流史 (Ⅱ) — 桃山学院大学・啓明大学校民際交流 (1981 - 2016) の歩み —」(『総合研究所紀要』, 42 (3), 2017 年 3 月) に桃山・啓明国際交流資料Ⅱとして掲載している。これを参照されたい。ここではその後 2017 - 2020 について, 継続記載する。以下のデータは国際センターの提供に基づく。

(1) 「学生国際交流報告書」

桃山学院大学の「学生国際交流報告書」は 1979 年度から 2005 年度まで刊行されている (初期のころ, 「表題」も「編集者」も一貫していなかった)。現在は刊行されていない。

(2) 短期交換研究員

付表 1 は, 桃山学院大学および啓明大学校から短期交換研究員として, 2017 ~ 2020 年度に派遣された教員とその年度を一覧表にしたものである。

付表 1 (継続) 短期交換研究員 (2017 - 2020)

年度	<桃山→啓明>派遣	派遣	<啓明→桃山>受入	受入
2017		0	朴千萬公衆保健学教授, 卞載雄国際通商学科教授	2
2018	新保朝子 国際教養学部准教授	1	朴慶敏看護学部教授	1
2019		0	KIM, Hansoo 都市学部教授, KIM, Tschung-Sun 韓国学部教授	2

2020	COVID-19 のため中止		COVID-19 のため中止	
小計		1		5
総計		23		33

出所：桃山学院大学国際センター。

既稿付表1訂正（『桃山学院大学総合研究所紀要』第42巻第3号,2017年3月）：

(1) 桃山学院大学派遣短期研究員 井上敏経営学部准教授の派遣2008年度を2009年度に訂正。

(2) 啓明大学校短期派遣研究員 2016年度李ビヨン人文学部教授を李柄魯人文国際学部教授に訂正。

(3) 韓国歴史文化セミナー

付表2 韓国歴史文化セミナー

桃山学院大学・啓明大学校交流協定締結に先立って始まったが、その希少価値性も、日韓交流が一般化されたので2003年以降中止（桃山学院大学）となり現在に至る。

(4) 交換留学生

桃山学院大学と啓明大学校との間の交換留学生制度は、1988年度に開始された。付表3は、2017—2020に両大学が派遣および受入れを行った学生の氏名とその年度の一覧表である。交流協定に基づく制度ゆえ、学生に特別な条件が付与されており、優秀な学生が応募している。

付表3（継続）交換留学生（2017—2020）

年度	＜桃山→啓明＞派遣学生	派遣	＜啓明→桃山＞受入学生	受入
2017	榎本陽奈子（15L）, 平山葵（15L）, 杉山花奈子（16L）	3	李 敏圭（大学院）, 李 東建（日本学）, 徐 希昌（日本学）	3
2018		0	朴 旼知（日本語文学）, 梁 智現（日本語文学）, 李 叡眞（日本語文学）	3
2019	谷本優麗愛（17L）, 梶原穂香（17L）, 河村桃香（17L）, 船守明日海（18L）, 早川愛（卒業生）	5	朴ダヨン（観光経営）, 裴周元（広告広報学科）, 金 柔榮（日本語文学）, 姜 旻征（日本語文学）, 金 智仁（観光経営）	5
2020	COVID-19 のため中止		COVID-19 のため中止	
小計		8		11
総計		46		84

出所：桃山学院大学国際センター。 桃山学院大学における学籍年度の記号, E(経済学部), S(社会学部), B(経営学部), L(文学部, 2008以降は国際教養学部)を表す。

（5）短期語学研修

桃山学院大学では「海外韓国語研修」として、啓明大学校では「一ヶ月短期語学研修（日本語）」として、1999年に開始され、現在に至っている。少人数での研修ゆえ、充実した研修となっている。

付表4（継続）短期語学研修参加者数（2017－2020）

年度	桃山学院大学派遣 海外韓国語研修	啓明大学校派遣 1か月短期語学研修（日本語）
2017	中止	5
2018	6	7
2019	10	5
2020	COVID-19のため中止	COVID-19のため中止
小計	16	17
総計	101	101

出所：桃山学院大学国際センター。

（6）職員研修

職員研修は、啓明大学校においては2016年までに6回行われたが、その後は明らかでない。過年度の職員研修参加者については、徐・伊代田（Ⅱ, 2017a）付表5（156-157頁）参照。

共同編集のひととき

桃山学院大学大阪市昭和町学舎にて 2017年6月12日



徐龍達 桃山学院大学名誉教授（右）と伊代田 光彦 同名誉教授

The Japan-Korea Exchange History in Academics, Education and Culture (IV)

—Exchange Between Momoyama Gakuin and Keimyung University
(2015-2020)—

IYODA Mitsuhiro

This paper deals with the history of academic, education and cultural exchange between Momoyama Gakuin (Osaka) and Keimyung (Daegu) University. Ever since they established their sister university relationship on 14 December 1981, the two universities developed multi-level exchanges among academics, students and administrative staffs and have obtained rich results. Suh and Iyoda (written and edited) have published the history of (1981-2016) as “The Japan-Korea Exchange History in Academics, Education and Culture (I), (II) and (III).” This paper covers from 2015 to 2020, concentrating on the International Academic Seminar. Aiming at seminar’s enhancement, we have had a remarkable change during this period, and we need to see the expected result. This issue also includes some view and recollections of the international exchange by important posts in both universities and a staff member of the International Center of Momoyama Gakuin University in the supplement.